

夏より秋へ

三、三、 富 永 雄 載

試験了へて夏草の上により立てば行く雲白し風やはらかし
西風に烈しくありともあををを日々々に伸びゆく新芽うれしも
月影は松の葉越しにこぼれきて小簾吹きかへす風のすししさ
海風に詩集のページはためきて人影見ぬ別荘のひる
すゝ風は海原遠く走りきて白きゆかたの襟を吹くかな
旅人は眞夏の雲を打仰ぎひろ野の果ての町おもひけり
乗合の人影へりて並木路をぬひ行く馬車に夕日さすかな
一管の筆たづさへて草まくら身を行く雲にまかせてしがな
蚊帳越しの電燈くらし薬の香高き枕に涙ながれぬ
病床のつめたき胸ににじみくる紅き灯よビールの泡よ
病みぬれば若き命も糸のごと細き望みに生くるかなしさ
千萬里たゞ一息にかけり行く夢さめ果し病床あはれ
かすかなる羽音を立て、病床の灯をめぐりつゝ闇に消れし蚊
長病の胸を噛むなりめしうごの睡く息のごと青き喪襟

(以下病床にて)

下宿屋に病む身は若しコエの疾く得ること涙するかな
眼とづれば寮顔にとよむ寄宿の樂しき一夜思ひ出にけり
物皆を灰色に染めよゆく秋のつゝむにあまる胸の愁よ
心よく浴槽にひたり熊本の友思ふ日よ病癒ねんとす
水のごと空は晴れたり秋風になびく大旗紅にして
武夫原の緑をふみて馳せちがう男の子いさまし馬肥ゆる秋
樂の音の秋晴の空にひくとき紅白緑の色きそひゆく
月清き秋の夜すがら古ローマの哀史讀まし城跡にして

(以下運動會の歌)

秋のさげび

二三、甲二 有 田 俠 花

黙々たる大阿蘇は大なる自然の歌への神である。不平になやむ若人は阿蘇の雄姿を仰げ。悲觀に生きはられぬ若人は噴火口壁にたて。

狂ほしき心しきりに叫びつゝ渦巻くけむりに石なげて見よ。
何事も大あそのけむりに秘めこめて世の謎とせむねぎなりしかな。
古さとの人等の蔑し目つめたさに旅にやすらふ姿さびしも。
義理は強しおそろしき力やすくと男一匹死など思はず。